

カールリ・カーンへり見学報告

望 月 海 淑

先号において「碑銘幻想」なる一文によって、インドの Kati の宿院に見られる碑銘について述べたが、順序によれば、今回は Mathula の碑銘についてとり組むべきであろう。昨年来、そのための準備を進めて来たのではあったが幸なことに、昨年末、インド日本寺落成記念法要をかねて、インドを旅行する機会に恵まれ、Kati を参拝することが出来たので、急拠、予定を変更して、Kati 見聞記に切りかえ、資料だけにたよった前論文に誤りがあれば正して行きたいと念願をした。従って Mathula の碑銘に關しての報告は次号以下に延期されるので、御了承を願いたい。

1

ボンベイに着いたのは十二月二十二日の夜九時。ホテルに着いて夕食をとったら十一時になっていた。ボンベイの街は非常に明るくて、これが今迄歩いて来た北部インド、仏跡を中心としたインドと同じインドとはどうしても感じられない。思わず口笛を吹きたくなる心境になったが、この解放感に似たようなものが Kati への旅立ちをさせたのかもしれない。というのは、本来はこれから Ajanta の石窟寺院へ行くことになっていたのだが、 Indian Air Line のストに鉄道のストも重なって、どうしても Ajanta には行けない。止むなく二十三・二十四の両日、ボンベイの周

辺の観光ということに切りかえられた。これはどうでもいい自由時間だということだ、おまけにボンベイの街は、土地不案内のものでも容易に一人旅を思い立たせる程に明るく、雰囲気を持っている。「Kartiへ行くぞ」私はその夜の内に思い立って、たった一人で車の手配をたのんだ。気負い心からだったが、一人きりだということで、不安がないでもなかった。ところが、後の席についた秋田の分銅志静師が同行を志望せられて、実はほっとした。

翌二十三日、横須賀の建築業の村上豊さんを誘い、甲府の梶山妙浄尼を加えて、四人で出発することになった。ところが車の運転手君、Kartiだと行先を告げたところ、カーネリーだろう、五十キロ先だという。そんな筈はない、カーネリーだ、もっと先だといつてもよく解らない。地図を広げ説明し、Ponaの手前だといったところ、やっと理解したらしい。やおら車は走り出した。時に午前十時。現地に着いてから解ったことだが、Kartiは昔の名前で今はKartieと呼ばれている。解らない筈だ。

市内をぬけると有料道路になった。ニューボンベイの建築が進められているというあたりをすぎると、インド特有の大平原になった。ところが北部とちがうところは、やがて行手に山が見え出したことだった。一時間以上も走ったので、あの辺の山が目指すKartiかと思ったが、車は一向に停車するような気配を見せない。二時間近く走って、車とはある部落に入って小休止。こぎれいな飲食店が並んでいる。

再び走り始めた車は、いきなり急な坂道にかかった。つづら折れの坂道は箱根山のそれに似ている。かなり昇ったところで珍らしくトンネルをくぐると、いきなり目の前は断崖絶壁だった。はるかな彼方に断崖の上の部落が見える。或はボンベイあたりの避暑地なのかもしれない。瀟洒な建物が点在している。心なしか風も涼しい。更に走り続けて、左手に山が近づいて来た時、運転手君、左手をあげて、あの山だ、とどなった。成程、島の向うの丘のような

山の中腹に、黒っぽい岩みtainな部分が見える。

街道からそれて脇道に入っていくと、黒っぽい部分はどんどんと拡大されて、ほら穴のような部分も見え出した。大勢の人々が動いているのも見える。今日は日曜日、信仰熱心なインド人のことだから、大勢お参りに来ているのだろう。ボンベイからおよそ一四〇キロ位。十二時をとうに過ぎていた。

駐車場に車を入れると大勢の人々が集まって来て、口口に何かを喋るが、何のこともか解らない。かまわずに歩き出すと、一人の老人が先頭に立った。この人が案内人だった。急な階段状の坂道が延々とのびている。暑い。木陰で一休みしてふり返ると運転手君も上って来る。そういえば「私はブテスト Buddhist だ」といつていた。途中の茶店で一休みして上ったが、一キロも歩いたような気がする。眼下に盆地のように高原がひろがり、はるかな彼方に今来た街道が一筋光っているのが見える。右下に点々と部落のあるのが見えるが、他にたいした部落があるようにも見えない。何故に、このような所に窟院が出来たのだろうか。

2

入場料を払って中に入ると、前方左手に目指す Chatya が見え、その手前に岩がえぐられたような大きな空洞が見える。空洞には階段があり、その上に Vihara がある。

まづ Chatya に行く。現地の案内人は Asoka ピラーだといったが、Chatya の入口左に大きな十六角の石柱が立っており、上部もそれにまねた背中あわせの獅子がのせられている。しかし Asoka ピラーの獅子が首筋のところで背中合せになっているのに対して、ここの獅子は背中あたりにでくっつくように仕上っており、その台座は四角であり、全体にサルナートで見る Asoka ピラー程に精巧な出来栄ではないように思われる。^①

ピラーの後が入口であるが、半分は破損してしまつたらしい。しかし、残っている柱には銘文が彫られている。^②

この石柱の後が *Orchestra* の入口。真正面に大きな入口があり、左右に小さな入口があるが、それらの間、更に右横等に沢山な彫刻がある。

まづ正面入口の右にある豊満な姿の男女一對の姿が目を引く。^③ 案内人はこれは寄進者の像であるといい、ミトナ像ではないかとの質問に対して彼は、ミトナはこんなものではない、これは健康そのもので信仰者のあたりまえな姿だと何のけれん味もなくいつてのけた。その自信ありげな断定の姿は、インドでは宗教的なものの中に、宗教の否定する人間本来の性的欲求を、端的に具象化したものを並べ表わすことに、何等の矛盾も感じなかつたようである。といふ高田修氏の言葉を想起させるほどだつた。

そういえば、正面入口右の男女像は男の右手が女の肩を抱く形のもので、女は左脚を曲げて右足に組み合せており入口左にある男女像は上半身は同じポーズであり、女の足は曲げられず真直ぐに立っているもので、両者共に腰布らしきものをまとっているだけであるが、その姿からは豊満なものながらみだらなものを感じられて来ない。それどころか、この両者の像の間には侍者を従えた釈尊像があり、更に男女像の下にも釈尊像がみられる。日本の仏教的考え方からすると、ちょっと想像出来かねるところであろう。

真横には大きな三頭づつの象が彫刻され、その上部には仏・菩薩像とともに男女二人づつのたわむれるような姿が彫刻されて天井まで馬蹄型の飾りがある。静谷目録五一六^④に出て来る

Bradasna 比丘寄進の *nithuna*

というのは、この像についてのものかと思われるが、これについても案内人はダンサーだといひ切つた。あるいは当

時、このような服装で人々は活躍したものでしょうかとも思われる。

入口の上には非常に大きな半円球の明り窓をかねた窓がある。これは人が出入するところの高さよりはもっと高い程であり、それには木をもって飾りがつけられている。このことについて、同行した建築家の村上豊氏は、石窟寺院が単に岩山を堀ればいいというものではなくて、平地の上に建てられた寺院をまねていることを物語っているようである、といわれた。

前号で紹介した静谷目録五二〇に出て来る碑銘、「大衆部の出家比丘の支持のために」という言葉は、この真正面の入口と右横の入口との間のフリーズの上に書かれているわけであるから、この半円球の窓の下にあることになる、と思われる。

3

Chaitya の内部の奥行は約三八メートル、幅十四メートル、高さ十四メートルで Kanheri の Chaitya と同じような型をしており、真正面に石造の Stupa があり、入口両側には石柱が等間隔で立ち並び、Stupa の後ろをも廻っている。

Stupa の手前までで片側十五本づつの石柱が並び、これらは四角で三段の基盤の上に丸型の台があり、八角の石柱がその上に立ち、Asoka ピラーの上部にあるような台がのり、更に四角な四段の台の上に、一頭の象がのり象の上には四人の男女がのっており、女はかなり豊満な肉体をしている。

この飾りのある石柱のうち、入口から見て左側の 3 4 5 6 7 8 9 10 14 と、右側の 5 8 11 13 14 15 には銘文が彫られているが、その銘文については静谷目録を御参照願いたい。^⑤

そして Stupa の後の七本の柱は八角形のみで上下の何れにも飾りはない。しかし、右から二番目の石柱には銘文が彫られている。

尚、左側五本目の石柱の表には、絞のような飾りがあり、右側八本目の石柱の表には塔の彫刻がなされている。

Stupa は Kanheri のがあまり裝飾がないのに比べ、ここのはかなり裝飾が加えられており、頭上の傘も残され、Chaitya 内部全体に木製の梁が破損されずに残されている。要するに全体的に見て、Kanheri のそれよりもかなり精巧な彫刻であり、保存度も良いといえよう。

4

Chaitya の左側にかなり大きな洞窟があるが、その洞窟の内部に Vihara がある。長方形の入口を入ると中は部屋になっており、片隅にベットがつくりつけられている。このような部屋が洞窟の奥に設けられており、真中には従者をともなった釈尊像が彫られている。Chaitya の北の Vihara の、南から数えて二番目の僧坊の入口の右上の壁に、大衆部の所領として云々、という銘文があるというが、ここの窟院のあたりだろうと思われる。確認をしなかったのがおしまれてならない。

洞窟の右手に、近年になって作られた鉄製の階段がある。それを上ると Vihara があり、十三室の同じような僧坊があり、十四 m と十三 m の広間の左手は一段と高くなり、王様たちが説教を聞きに来た時に坐ったところだという。更にその上に石柱のあるベランダを持った Vihara があり、この高さでも水槽が設けられている。鉄製の階段の左手に石造の階段があり、これを上ると、そこにも十一室の Vihara がある。従ってこれら三つの Vihara はそれぞれ洞窟の上にあることになる。

更に、Chaitya の前を通りこして南に行く、そちらにも二つの Vihara があるが、特筆すべきことはないようである。ただ手前の Vihara の広間には一箇所、水がにじみ出しているところがある。そこにヒンズー教徒によって赤い色がぬられている。何にでも関係し何をもヒンズーのものとするバイタリターが感じられてそれ恐ろしくなる。そういえば、Chaitya の入口前にも急造のようなみにくい建物があり、ヒンズー教の寺院として参観者にむかつてがなりたてていた。このような力が長い生命をもってバラモン教の昔から現在にまで生きのこるものとなったのだろうか。

5

二十三日、カーネリーへ行く。カーネリーは Kanheri といわれ、ボンベイから四五キロ位の北方、ナショナルパークの一角にあつた。^⑥ ナショナルパークの門を入れて少しすると、林の上に黒ずんだ山が見えて、あのあたりが窟院のあつたところだと思わせる。

Kanheri はサンスクリットの Kanderi からおこつたといわれるが、それは黒い山を意味している。緑の森の上の黒い山は、昔から特異な風格をもつた山として人々の注目を集めて来たのであるが、Mrs. Sndha B. Patankar と Hari K. Kewalia の著した二書の案内書によると、この Kanheri は仏教徒にとつて僧院であつたとともに沢山な、貿易商たちにとつては Sopara, Nasik, Ujjain 等々の各地への交通の要衝でもあつたらしい。^⑦

Kanheri は海抜およそ二六〇メートルであるが、そこにある谷川をはさんで幾つかの山々に、次々と窟院が堀られて行つたもので、BC 一世紀から AD 十世紀の間にかけて堀られたものと考えられ、そこには一〇九の Cave が遺されてゐる。

その大部分は窟院であり、岩肌に次々と軒を並べるように窟さくされ、山の上に向って次々と堀られ、それらは坂道や階段によって結びつけられている。しかし、これらの窟院群の中で、何といっても中心となるものは、No 3と呼ばれる Cave であろう。

階段を上るとすぐ右側に No 1、No 2 の Cave があるが、No 1 は完成なき Vihara といわれ、外側に二つの柱が立っており、中には住居に使われた部屋がある。No 2 は二つの塔 Stupa をもった Vihara であるが、塔の後は、難破船とか、ライオンに襲われている人間とか、不幸にさいなまれている人々の姿を彫刻したものである。不幸・災難をのがれるための祈り、それを塔に対して行ったものだろうと思われる。そしてこれらの彫刻に接して、仏陀に身をかがめている九人の帰依者の彫刻がある。そしてそれに接しているインスクリプションは、九人の名前を書いたものだという。Hari によると、これらは後になって加えられたものだというが、Mrs. Sudha はこれら九人の名前を次のように書いている。

Nannovaidya, Bhano (sk. Bhano), Bhaskar, Bharavi, Chelladeva, Bhopai (sk. Bopyaki), Bhattabesu, Suvai であるが、Mrs. Sudha はもう一人の名前を欠いており、その理由は書かれてはいない。そのかわり、この文字は五世紀の文字であることを付け加えている。

6

No 3 は Chaitya である。Chaitya というのは礼拝、祈りなどを行った場所であり、今の寺院の本堂のような役割をになったものであるが、Karli, Kanheri とともに本尊の型として大きな Stupa を真中に建立している。これに対して前にも紹介した Vihara は、僧たちが生活をした場所であり、今の庫裡のようなものであろう。これを裏書きす

るように、Vihara はすべてネットを所有しているのであるが、更にNo 10からは窓の跡、No 84、87からは埋葬の場所としての跡、No 101からは水洗便所の跡が発見されている。Vihara の中で沢山な僧たちが生活をし、中心の Chatya に詣でて祈りをこらし、更に別の場所 No 11などで仏教思想についての論議をしたものではなからうか。このNo 11については後述することになるであらう。

そこで肝心のNo 3であるが、この Cave は入口左手に小さな Stupa がある。この Stupa は仏陀の像を正面にもっており、一般の Stupa とは全くちがっており、Stupa に対する考え方の変遷を見ることが出来るだろう。正面には玉垣の内側に、アショカ・ピラーをまねたと思われる二本の柱が左右に立っている。右側の柱は頭には四頭のライオンがのり、左側の柱頭には鉢を持った Yaksha がのっている。その後には四本の石柱があり、内一本は左右の岩壁に密着している。

この柱をくぐると、歩足にして横巾が十四歩、奥行四歩の広場がある。この広場の正面は Stupa の入口であるがこの広場のまわりには非常に沢山な彫刻がみられる。

まず入った真横の壁には高さ七メートルに及ぶ立像の仏陀の像が一对ある。右手は下に真すぐのぼし、手の平を手にし、左手は曲げて左の肩のあたりの掌は裏向きにし指先は曲げられている。薄い着衣の仏陀は肉つきよくどっしりと堂々たる体軀であり、頭の髪に肉けいがある。お顔は実にふくよかにして柔和であり、人々をやさしくむかえ入れてくれ、ほのぼのとした和を与えてくれるように思われる。このようなお姿が、どのような地域で制作された仏陀像と似ているかは今後に機会をゆずりたい。

正面入口の横の上段には侍者を従えた仏陀や塔の彫刻があり、その下には男女二人づつの奉献者の像が左右にあ

る。男女ともに腰布をまとっただけであるので、肉感的な像で片手を下げ片手を折り曲げて何かを手に持っており等身大である。

Hari によるとこの像は、この Chaitya を審進した夫婦の像だといふが、Mrs. Sudha とするや、この Chaitya の内やあたりには九つの碑銘があり、その一つは、この Chaitya が、Yajnashri Shatakarni Gotami putra の王の時に作られたことを示し、北部インドから来た二人の商人の兄弟 Gajan と Givir とによって奉獻された、としている。この説によるとこの男女の像は、この二人の兄弟夫妻ということになるであろう。そしてこの時の王は AD 一七七―一九六年の王だといふから、これが創られたのもその間のことになると見ることが出来ることになる。尚、この男女の像の姿、型、あり方等は、まことに Kati のそれに似ている。

入口から内部に入ると、そこは奥行き二十六メートル、広がり十二メートル、高さ十一メートルという広間に出る。真正面には直径四・九メートルという石造の Stupa があり、入口の壁面を除いて三十本の石柱が、馬蹄型状に林立している。

Stupa の横から後にかけて七柱、横から手前にかけて十一柱づつですべて八角型である。この内、左右の手前の六柱づつには見事な彫刻がほどこされ、Stupa にむかって左側の手前の五柱には頂部だけに彫刻がほどこされておるが他の十三柱には全く飾りが無い。何故であるか、その理由は解らない。

Stupa は囲りに小さな穴を持ち、塔の頂には傘があったらしい型跡をとどめている。更に天井には木の傘があったらしい型跡をとどめている。

No 3の Chaitya の横の路を行くと、路は二つに分れる。右側に行くと石段で岩山を登り、今の No 1・2・3の Cave のあつた上に出るが、そこらの岩山にも沢山な Cave—vihara がある。分れ路のところ左に行き、いくつかの Cave を通りすぎると No 11の Cave に出る。岩山をくりぬいて作った柱が林立し、正面と両脇に入口の階段がある。中に入るとペランダの端に仏像彫刻があり、正面には端から端までの長い二段の石段が設けられ、その上には八角の柱が林立している。

そして中は大広間だが、大広間を横切るように二本の石の檀が設けられている。ここに集まる僧たちが机として使用したものであると思われるが、それは実に壮大な集会所であった。或はここにおいて仏教々義についての講義がなされたのではなからうか。

その奥には更に柱が林立し、その奥には釈尊のお姿が祀られていた。

8

No 34の Cave は他のものと目立ったちがいはないように思われたが、中に入ってみると驚いたことに、奥の天井に絵が描かれていた。薄暗いので懐中電灯の明りなどではよく解らない。夢中でストロボを発光させてとった写真が今手元にある。

右手を床につけ、左手を結伽趺座して脚の上のせて図柄で、赤と白の絵具をもって描かれたものと思われる。右に張った肩、くびれた胴、しなやかそうな腕の線の流れ、それらは非常に格調高く、身体全体から釈尊の慈愛があふれ出しているように思われる。

しかし、何故か顔の輪郭が明白に線描きされているにもかかわらず、顔の容が描かれておらず、頭髮の具合も解ら

ない。最初から描かれなかったものか、途中で削落したものか。

釈尊像は台上に座りその後には、棚のようなものが描かれており、その上には奇怪な絵が描かれている。この模様を調べることによって、この絵が描かれた年代を推定することが出来るのではなからうか。

この絵の描かれている右側の天井にも、絵が描かれているが、こちらはかなり破損が目立っていた。左の方の天井には絵は認められなかった。

更に一つ付け加えたいことは、この釈尊像の真中を通った縦の赤線と、肩の下を通った横横の赤線とが引かれていることである。これも何故か。なぜであるといえよう。

註

- ① 静谷目録 P 38 には次のようにある。
Maharathi (藩主) なる Gotiputra Agimitranaka が獅子の柱 (sihathaba) を寄進。
- ② 静谷目録 P 38 4 9 の参証
- ③ 静谷目録は右隅の一对の像となしているので、これは前号で扱ったような入口横の男女の像のことではなからうと思われる。
- ④ 静谷目録 P 40
- ⑤ 静谷目録では左側十三番柱となっているが、私の見たところでは十四番柱であった。或は私の点検ちがいかもしれないが。
- ⑥ Mrs Sudha の案内書では四五キロ、Hati の案内書では三五キロとなっているが、ボンベイから一時間以上かかったから、四五キロの方が正確かと思われる。
- ⑦ Hati は Kanheri は北への商業ルートであり、旅行者のための休息所として建てられており、非常に繁栄した町のように栄えたことを語っている。